

野居鷹 卷内貳

13
3038
2



3038
2

平尾せんびん

以尾ふよむ

多のふみ

多れふ

中た

由利稚野居鷹卷之二

万亭 雙馬 戲編



○別府二郎不圖密計醉奇酒

凡人の兄弟おかけの譬と車の両輪のあつて鳥の翼おとすと
なつとごとくとも其性各おなじかぞ別府兄弟の所業二郎
起總と下急仕して万事こぼれ浅く。當時已どが權威お但
せ人孤憐れこと恥し又兄庄司元押を性少言仕て其骨
通りみづうり不慮忽の振棄れせむじが今家を奪ふの
計九分中して終らぬふはうせむとて孤腹おしと

由利卷之二



おのひ何とぞ松子の方をなれ物おせんといふ組とて其輩も
種々計畧をめぐらしけり或夜もやせんやせんといふ事
のみをひめらじし。いさご寐も中へ居たり。され不次の間お
居とて青侍ともさほく雑談の次手おはり。門を隣國
陸奥の國より新小召抱へて。即等のありげり。声高く
中へけり。世女は不思議のふれ。我亦が故御十府の里
雌雄一匹双たり。満月の夜お其血をまわり。酒お初とれ時
是を呑む者。必とて嬉心おけり。とて聞く。世の坐言なかり。おれ
妙もあて。いとちやと。我ホり。まご故御おあり。けれ頃耻し。あ

あか懸想。けれ女の。あほりに心強かりし。ゆえ人おめて。お
ふすかし。あし。ら。例の酒をくらせ。其奇特とみおえて。
おと戯。と。また。な。れ。昔。語。こ。と。を。語り。い。て。な。ば。和。ぬ。一。等
と。も。酔。ね。先。より。春。心。や。出。来。な。ん。は。り。お。ら。そ。の。毒。終。り
病。死。生。し。い。く。ほ。も。形。女。を。是。は。かり。ぬ。あ。の。ひ。出。せ。ぬ。取。惜。と
あ。と。お。な。した。り。と。鼻。と。て。ま。り。び。て。今。は。ら。泪。は。し。ら。み。う。れ。お
あ。と。お。ほ。と。お。も。り。今。より。足。下。も。追。付。て。死。出。の。山。三。途。の。川。も
手。お。曳。逢。と。渡。且。し。と。果。へ。と。よ。み。ひ。り。わ。れ。を。庄。司。纏。へ。お
隔。て。聞。居。り。し。が。お。お。黙。ひ。と。て。彼。里。の。鳴。雌。雄。を。取。寄

由利若卷之二



陸奥十府の里で
 鳴の一双と殺し
 奇蹟と云

この如く調へ花浴より到来の美酒と号し梅子の方へ
 めちあり其真心はとてかえんとを計けれ又そのころは身二即
 起繩は連日酒宴成而巳とて遊獵おぼけり専ら放埒成
 おりしと兄庄司傳へ聞て甚と怒り機嫌以の外由二郎
 出られ入りけれ元より頑愚の二郎と云ふ驚か當家の者
 ともよしあしおけけ我々尊ぶる庄司との權柄取を以て
 たり。あうれお今此人お悪み捨らるる時ひとくお嬰兒の乳
 離してこれお異なり福の宜舗已とみたりが行跡を陳謝
 せんとして元押が方へ到りしに庄司は此而國境巡見お出か

今日是非家お屏りまのんと従者ども言葉にははるせ後
 を相とわし四方山の物語お長くと兄の帰るまで待詫ら
 且書齋の棚お京師到来の流霞と云ふなれ管ありけれ何
 ち海までひらたると一の壺酒氣韻都として鼻お動かし
 けしは能物おこを見おしけれ本姓忽地氣はし額お押と大
 お飲ひ如何お旁く我お亡君お従ひ在京以来かお邊鄙お
 ずめが。あがく青洲の従事お達とて酒中のお仙
 ぐやと兄の怒お詔事も打忘とあり合不盡り出れ
 ひき清心の仔お傾けられは須臾の間お香盡し。あをく

まうぞれほどに。さう燈のぶら声より揚御者の何よらん。靴の具
れに名ひはれなれ君よ。娘あせんと。誤もなれ。近み唱ひあし。素
袍とどけあ。鳥帽子はゆぐみ。取打仰。毛虫のこと。れ眉は。へ
文字小垂。且。一歩の高く。一歩は。ゆき。扇子。松子。高く。と。打て
よ。め。れ。く。我家。は。は。し。て。そ。帰。り。け。れ。

○ 金花猫謝主恩誑起縄

云程。別府。二郎。起縄。と。兄。庄。司。が。謀。計。の。酒。と。も。知。ら。ず。と。お。り。か
候。不。酌。は。く。せ。し。よ。り。心。つ。と。ね。く。春。心。専。ら。ほ。して。無。禮。か。ら。後
成。常。と。し。け。る。が。後。室。撫。子。の。方。け。色。香。小。迷。ひ。人。目。成。態。を。か

も。な。く。酒。さ。び。と。号。て。は。れ。から。唐。獅子。め。お。し。鼻。先。の。飽。す。て
赤。み。と。れ。成。か。と。え。ん。と。て。白。粉。成。は。く。は。は。彼。君。の。お。い。し。は。を。以。り
成。吟。行。あり。れ。果。は。み。ん。が。玉。章。成。簾。の。隙。より。投入。な。し。と。ある。
寔。小。真。さ。ゆ。し。事。も。な。り。叔。又。控。子。の。後。方。ハ。別。府。兄。等。暴。戻
成。悪。み。多。め。と。く。も。當。家。小。お。いて。老。臣。と。い。つ。所。縁。あり。と。い。且
由。利。稚。從。つ。く。鎌。倉。も。お。さ。し。志。す。め。成。者。も。な。り。け。且。は
幸。時。小。誅。成。ら。え。ん。と。せ。却。と。家。の。騷。動。小。及。べ。入。事。成。怖。且。一。世
念。の。月。日。を。送。り。も。中。也。も。頼。母。後。者。と。て。は。若。君。傳。り
六。郎。忠。先。一。人。サ。二。の。忠。臣。と。あ。り。あ。ら。國。門。の。出。入。控。み。り。お。ら

これ共小大事謀り多めことわらざり空しく若君の生長
樂み小甲斐なれ月日を送りむひし豈はらん別後郎
此頃や新しき恋慕し多し日毎小寄れ玉章は手あてぬれ
むつとよは言ねば是又御公痛めあはひとらなりし或
夕つと獨りふよ行と指越かこの中よひ詫多御坐の階
のりて夏を待とひくくかやとれ薔薇の花れ色香不馴
胡蝶と戯とて幸と給飼ふれ猫のさばねむはゆふ花と
情多く打散して蝶も飛たれ猫御膝近く己が食物やげふ
啼はとひけぬあながは佛在世は佛經ふ仇せし肩を

退け猫もありしとかや又我朝も命婦と呼とて至ことね
御おはえありしも何さは故あは事あやめんはゆれあはし
有りの瓜斯くもひふ沈みあは主のむも知んてと啼おねつ
こそ心なれ物なまそ背押さひけは彼猫も空眠しと襦袢
側小居りし其後と何地行けんえとねりふけは爰小
二郎起縄とはいつ頃兄庄司が方めて盗と食ひ酒の毒を氣
ふりしこと正小還着於本人の罪れがたおえとまは
先非は悔悪公は翻とつた小倭は無道の兄は
事はとひも付と庄司元押さはぐりり医療残れ然る

けくせども。二郎心神日々に乱し居。明暮唯撫子の方と慕
ふ。或時多ひけけ日毎ふたつれ錦木のいとは別れ
こそ口惜けれいふらうごは強面とも由利雅殿お別れ
とやまの今を過らふの細布胸合かわれ我おなりとも。げね
がれ国のうち。むそうに思ひりて公のこけ歎死なばなごう
よだ返りことこのなごてやると。或夜素袍の袖肩お結び。わか
裾引あげえ越の松が子樹とほし難く。摺子の常おおと
はと邊らうた。前裁の内へぞ入ふけれ。今宵はすに「風荒
空あく月曇りみ晴し物のけをひも定らなふ縁と。二郎の

いへ公嬉しく。妻戸のりへはごうり寄り。にわごとね薫
物さとかかりまき。戸ほそ細く押明へ誰人か。青葉陰に
お入かこれ月夜おしむはなう。二郎の遣り水お流めく。ほみ
小母の陰お蹲り。かかれんととれ。彼人声あめやうおまう。み
あつれは。起縄のめへおおとびや。なごかかれすて公ばうた。贈り
あつれ玉章人のる。眼も如何せん。返りてこの物。いもうねとねお
糸繰ら。がよは。通ひとほせれあせか。い夜う意とたやひ
め。仇人の国へは。いご業内してとあ。せ
立二郎がよ。それ侍女の言葉。二郎の魂天外あ。ひ膝は振る



田舎物語



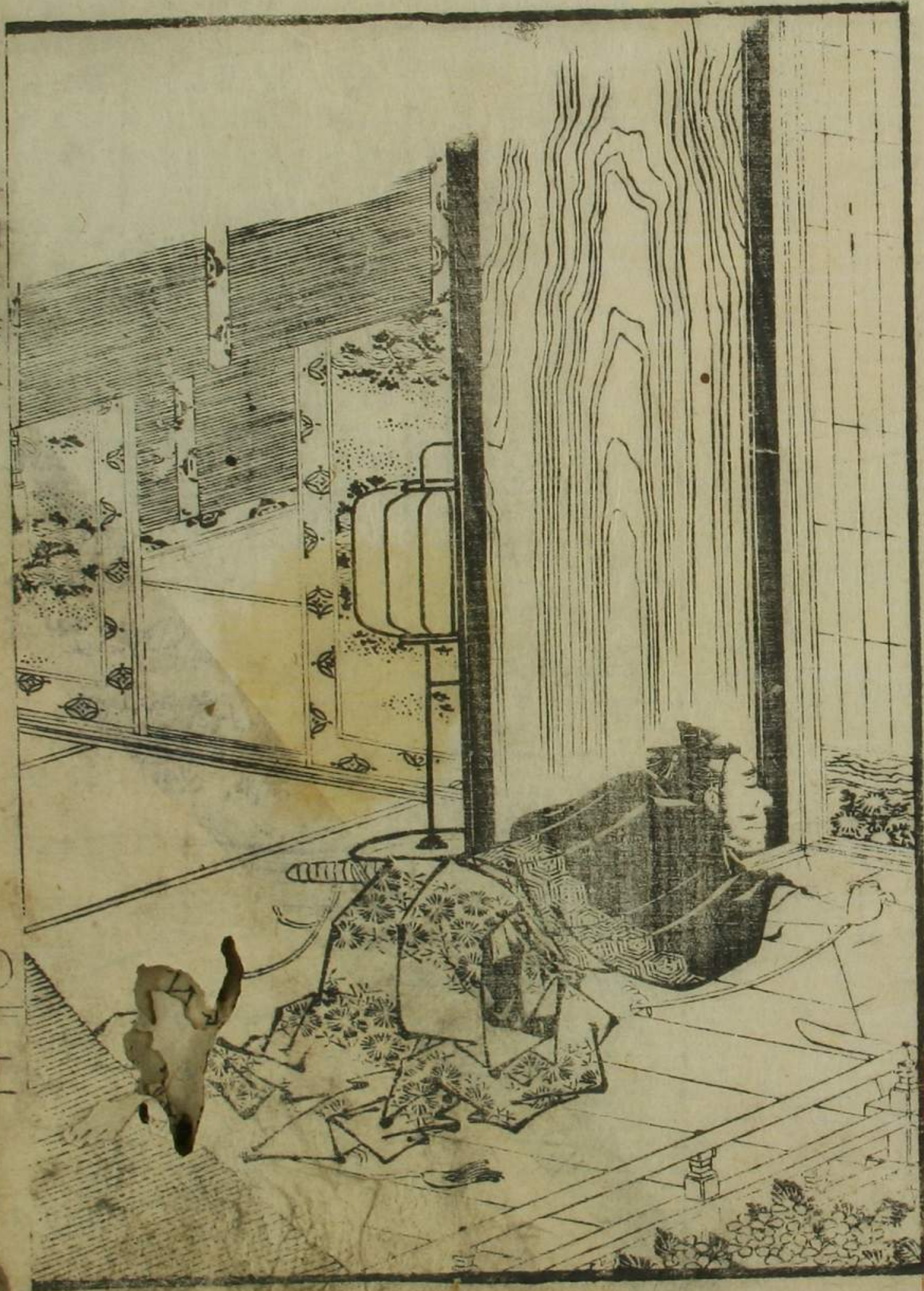
おきり
金花
主の
奇観
おきり
おきり
おきり

あしは足踏所と定はる唯尊命お任せと声遣ひはえ
おがけはばあな物堅の二郎の君おれ若死ん
もといふ声おはれぬ大勢の女房達おひなせ衣のりも夜
いそ立はるる媚めれたあつれ御所風俗にておがりてあふせん
はありの又いそぐつ何方かお引つひれつされおど起縄
らふよほとひさおがら遊仙の崖お揺ぐれどひ我かおれ若死ん
愛らるる面はれおとらおろけれ者をも竊おとこ鏡より出
して照へえれいそいそ巧笑倩より美目盼たりといふもはれ
まがれ心おの在中将光源氏おもおろはせとぞおはるれ

面影なればとみお心惚くとなり今日何の幸ひありて別府の家お
かた美男お生とれやと俄お衣紋うい絡ひ縮みあがりし赤髪
の鬘れあつら搔撫お其まおとつて御多の侍女いざせよ
と誘引と渡殿おこゆれ折くら五月の空けらひやと曇り
勝なれ夜半の風一村兩派透るあ連とあつら志光り捨子
ふじし入鳴神の音はのうふ雲井の余はお響えられお先へ
女房のこおお落しと打驚と燭より落せらるる玉の圍はあは
おらるる人もあつら浪の胸お動氣おあつらたぐり
おかたお白ひかんとお移れとらり同し御籠お仕へらるるおひ

あづけ忍草深ふのみ恋はし公の闇くぬの山はらぬとて
はあふ紅も梅子の君小通ひも人折やあはれ
ぞと誦言はしく打乱とて其風情小二郎起縄は年積
三十二才ふいれども一度もかやうの仇めか事小出會は
心中酔れぬく汗はあまに駒流茫然とれこの物陰
よりの燈火の影とてより待詫あは人のこ落涙汲も
せぬ仇一公此男は我身業内ははらせんといひりたるをさ
姿袖も袖へまといれて胸毛ひくれいささか戯と合は
猶奥深く引とゆくにあや彼君は御坐あやあはれ執帳乃

摸極もたどくあまて燈臺の影ほのらぬハ流石小町が
のらら翠のそとてあはれ紅力の志と紅を重縁十府の菅原
七布も七布もいつくね比翼の契顔そとひけてうし十橋
かれ御風情伏かすればはらぬと啼一聲に夏夜の夜は白
み渡りし山さらの横雲はあまて紫雲は甚の跡を照ふ
のらて忘れやぬ夕辺のはれ空寂しとて髪櫛けつりてあま
せんあまの小癢く衣の深色うつほひあは月軒の花田を
うかたさし足利のそめやらのこの端もはらしたる
出さるるさよと女君の公遣ひ夜もいつくそ昼も分たさる



由利若卷之二





かよ喰ひ飽すてふ呑む。あつひの舞或ひと唱へ琵琶和琴
は事なりたりとて。下總の國に潮来とやや。のりかた
まは海士が子の宿も定めど往こするはふらひみられり
節ははらび呑はしたれ器打鳴し。あししりた松子とれ
は。あまこ手巾や帽子とほし。まほく。戯と直不入れ。これ
金花猫が投子の切なれ言葉をや請引けん。主の爲小奥庭
の狐狸が方人と那。熟く化しすはされ。とは。二郎夢も
あつた。投子の圍とおや。あふ。豊々なれ夏陣の中。小太刀
も投捨あつた。ぬ物喰つたあや。そこらおら。どほちりじ。赤

膝あがりて。前後にたはら。ど打伏され。蚊蚋と更なり。粘こ
の毒虫ひくと取けた。全身うれ揚。血ふけ。泥ふそ。み眼
もめてらね。事ともなり。は。あ。別府一家の者ども。と日
頃我慢の起總れぬ。若や。天狗なんどいふ者。ふとと。なれや
あまひけん。此二日。三日。は。あ。爰かと。尋は。ひ。所。鐘の
園が預り。まはれ者ども。あ。の。換子。告。あ。ふ。驚。は。従者共
馳集り。あ。あ。ひ。か。た。二。郎。が。あ。の。肩。よ。引。け。て。こ。が。あ。み。て
帰。り。け。り。

○ 差羽六郎陥共討放奮府

公空虚なり時と魑魅魍魎との敵ふ事。あつては鏡
の虚霊ふして万物の影なきにせよと云ふ事。此の如く
おのれが本心孤失ひより。狐狸の鳥小迷ひをれ取とて
白癡と化すのみ。五痔瘻と病者となり。取れぬ事と口疔
啼つ笑ひつ。正氣はどれど。兄庄司心中大に不憤の是平
撫子の方ればれまじしより。起しは全く此君の仕業か
以の外ありみけし。此上は緑丸殿を失ひし事。辛に眼を
らせん事。我す心ありと兼く一味の族がからし種々計
あつてせざるも。若君の傳父左羽六郎義鉄石のごとく守護

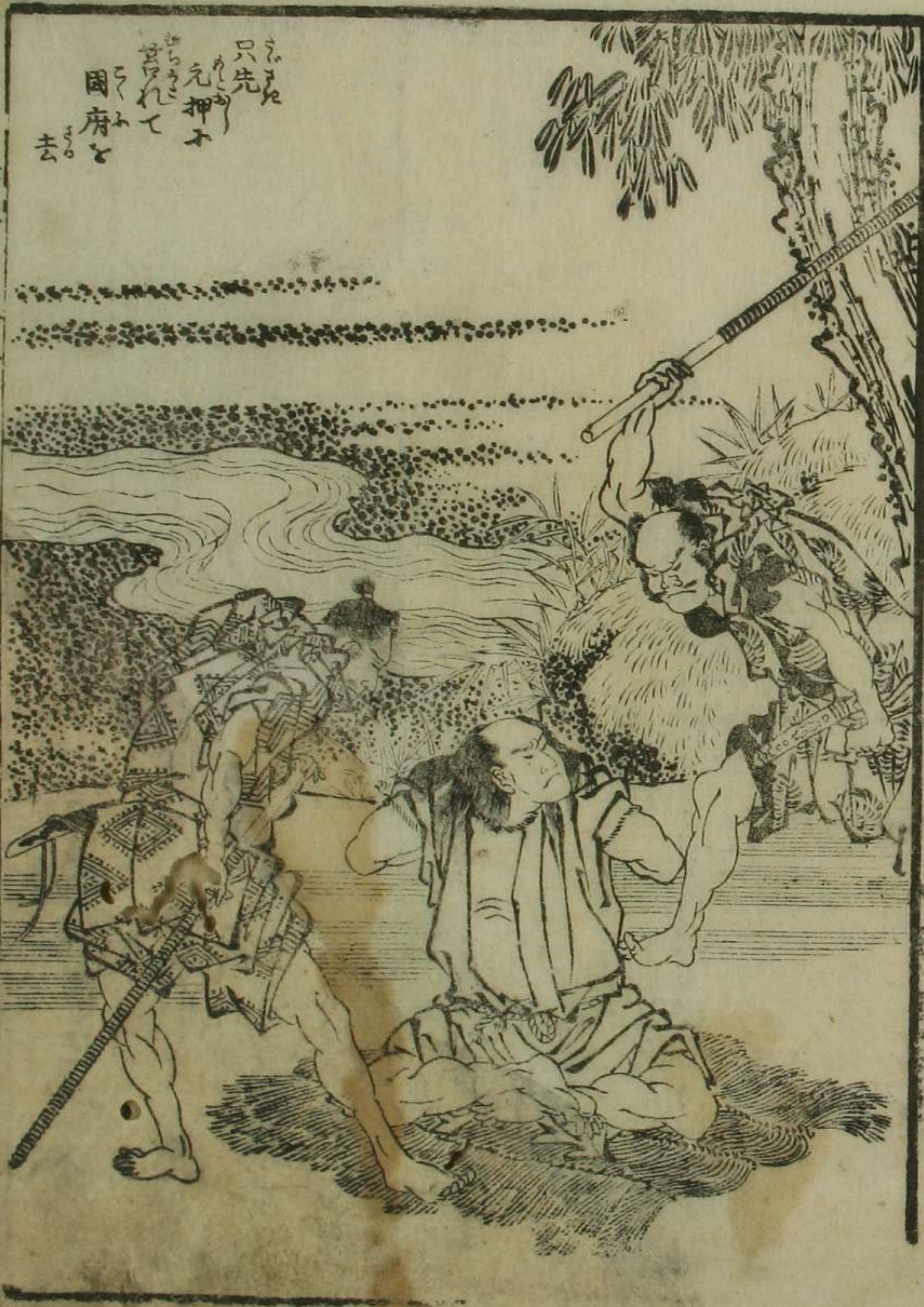
けとは。卒時ふり計ふこと能ひ。はるばるに先六郎を
遠ざけんとて。庄司忽地一の謀。派案ト人派して流言を
と。此と若君は。探所らかく。あひ入る曲者あれば。は
えりといふ人も。形けれど。又誰彼と云ふとも。叫合つ。都て
奇怪は人の言ひて。まかを習ひして。さればこそ。二郎代
に強勇の武士と云ふ。天怪の爲めは。牙派あやほつと。し
所爲あつたらに。輕んぶか。其の阿闍梨と。道德のみ
た聖お社おとせ。宜しく惡魔降伏の祈。頼みと。あつて
あつれざる。といへば。いやく。あつしよ。彼所の宮に。祝子。秘府

みちくはあじ争われずれ寄持あまなびあはせしと。
言罵れ言葉の下より。昨夜の直居も筑地の此方何者
ともあれどそみしう。行某が素曳の弦音あやられけん立去
ぬともり。一昨夜の夕間暮あは遠侍の聲あふ流めてあやし
人のけそひえふりなんど一犬虚吠吠とは万大声吠傳ひ
館の内物凄たまでにながひ小疑いと生どけ了。あにま
控子の方小宮仕へぬれ伏衣といふ女房をぬき是とあやみ
人母も告ごと若君の常小行多ひわれ方の庭小ひそく小砂
ありて風説誠るくは曲者かるとと足海残とる一井れ

證故小傳父六郎どのへ告りやと用意はしけれ小或夜の明
振おけれ砂の上あらら人の足跡乱とれぬよしくと
みつけてえれば森所の床下へ續とたれはるりければ伏衣
胸うちぞぞ死早速まぐのはし六郎かかてせけれ元より
忠臣一途の差羽六郎うれば伏衣が告越したれやうと小
いこの此頃の流言全く例の別府が人の公小疑いと生せせん
爲の謀計とのみち居りし小斯明自ら證據おれん
倭人原いろうれ野公はにしてまははれぬれば若君は
身の上危れと。磐石はつと雞卵の上小釣小異あ

と愕然として大に小おどろけ此上と我夜毎小緑九段の寝
の床れ下小忍び。むとくに守護し。あつたあつたおどろけ
定めけね。叔とを別府が女曲の陥小落入けねをせ念ある。是ハ
伏衣が女と為小虚説の證故探れ折を考へ一味の者をもに
言付ケ。つごと足跡を附させうけたり。去秘小差羽六郎の森
食派をよんせと夜まゝ森所の床れ下小蹲了守護し
けねを時分はよしと或夜のあつた別府庄司大勢と引見し
此頃の雑説打捨おれ難く。今宵寝否派紅んぬめ庄司
元押さるが幼君派驚固うると呼了。奥あつて輕卒派引

連若君の森所派始め。らはる探り求めけ。ははは差羽六郎
派引せり。此時始めて六郎忠先計小當とれり。と志す
りとも。今更陳謝せん。再言垂る。黙然として頭派れ無念
の涙襟派ひくとと斗なり。庄司大の眼派却りひて。ろ。こ白眼
いう小忠先派代。當家の禄をろひねが。竹ゆえあつた床
下。身派ひそめたねと。是全く當君の幼稚派あみどり思ん
て賊宝派盗まん。とすれあ。ん。幸お我是を察し。今賊を捕り
たり。とくね。ふ一人の業おあじ。速よ徒黨派白状させん。誰
うあれ。さ。女門を拷問と。べしと高。か。小罵。派。頃。く。六郎派



百合石卷之二



高き小舟の舟は、由軽卒とも立かり、杖柱のりて散ぐら
打を衣類こそぐく破れ血面が汚した。六郎こそくもせよ
木音声み呼りていりく。今日誤つて汝が其母の畏めかかれ
はれど我誠忠と天神地祇もまじしめと所なり恨らくへ生
かす汝が肉を喰つたことと汝と言ふ。其後の眼が同じ更
まもいざれの庄司かしくと打笑ひ此期よ及んぐ其が
賢女如み己が非があらふひの汝はことと愚かしの甚し
なり。早くに引出して賊が首が削よと下知され所へ緑を
人をのりて伝せられければ、六郎忠先と我愛臣ありて

今罪あり。古語おも門に當れ時の蘭蕙とてども必鋤といり。
あえて法を乱るがらん。さうながら今ほでの切お智死罪一等と
ゆれし國中に追放せしと命じまへば。庄司も止事なほと
卒お下知を傳へるは許多答打く。園境が追拂ひり。斯て
よ。後は一人として庄司が命お通る者なり。其の勢ひ揚
て緑九どののあれも形が如く。今は由利の家頼母に
ぞんくみちる

由利維野居鷹巻之二 畢

由利維野居鷹

